

きらめきのほかに呼びかたのない

鈴木朝子 — 編集者

『光抱く友よ』 高樹のぶ子



高校生の頃、生年月日の数字をひと桁ずつ足して行って、その合計の数字から運命を占うゲームが流行った。

1977年なら、1+9+7+7+……ということですね。

そうしたら私たち運命おなじだね、と思ったのは、そのころ仲の良かった友達の誕生日が1977年12月12月で、私のが1977年11月22日だからで、要は足すと同じ数字になる。同じだったのはその数字だけではなくて、身長も体重もだいたい同じで血液型も同じ、どちらもふたり姉妹で妹の年齢も同じだった。

以来、付き合いは20年以上続いていて、人生が浮いたり沈んだりしたその時々、たいてい最初に報告してきた。長く一緒にいるのはたぶん「おなじ」だからではない。誕生日が近くて家族構成が似ていて体格が決めるキャラクター設定（笑）がおなじでも、おなじものを見ておなじことを聞いて、ふたりがまったく違う感想を持つことはよくあった。違いに気づくたびにそのわけを知りたいと思ったし、環境や条件にもたらされた自分たちの数少ない違いを見つけようとした。それはそのまま、相手を理解しようとする作業だった。

誰かと自分が似ていることは安心で心地が良いけれど、そこに「欲」は生まれない。「そうそう」とか「あるある」をくりかえす付き合いに、強烈な魅力はない。私がそれに気づいたのは大人になってからだったけれど、稀に10代でそれに気づける人もいる。

『光抱く友よ』を読んでから、人と人は「ちがう」から友達になるんだと思っている。

アルコール依存症の母親を抱え、水商売のかたわらに高校に通う「彼女」と、大学教授のひとり娘である優等生の主人公。会話を交わすようになったある日、主人公は彼女から「これ、昨日カツアゲしたもの、あんたにあげるよ」と腕時計を渡される。主人公はクラス中の視線を感じながらその時計を、笑顔でゆっくりと腕に巻きつける。そのシーンは、ありふれた言葉であることを承知で、とてもきらきらしている。

友情というのは、いくつもの共通点を見つけて生まれてくる共感ではなくて、どうあがいても理解することのできない、分かち合うことのできない痛みを必死になってわかろうとする気持ちのことをいうのだと思っている。そしてそういう友情を10代後半の多感で迷いの多い時期に持った人にしか、自分のことで精一杯の頭を他人のために懸命に働かせようとしたことのある人間にしか、持つことのできないきらめきがあるのだと思う。🗨️